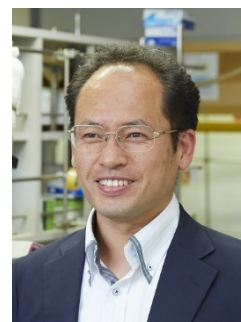


結晶との出会い

有機結晶部会長・阪公大院工 小島 誠也

このたび、本部会の部会長を拝命しました大阪公立大学の小島誠也と申します。2023-2024年度の2年間を務めることとなります。2021-2022年度に部会長を務められた吉岡直樹前部会長には、コロナ禍での大変な時期に本部会を指揮し、オンラインでのシンポジウムの開催など運営に苦勞されたことと思います。本部会の活動を止めることなく指揮されたことに改めて感謝申し上げます。本年はコロナ禍からの正常化への回復が叫ばれていますが、本部会では既に2022年有機結晶シンポジウムにおいて、名古屋大学の阿波賀邦夫実行委員長の下、シンポジウムを対面で実施し、多数の参加者が集まり盛会のうちに終了いたしました。これも部会員の皆様のご協力のおかげであると感謝申し上げます。今後も部会員の皆様方からのご協力を受けながら、本部会の活動が順調に運営されるように努めてまいりますので、皆様方のご理解とご協力の程、引き続きよろしくお願い申し上げます。



さて、筆者がこれまでに「有機結晶」とどのような出会いがあったのかについて述べさせていただきます。これまで「結晶」との出会いがいくつかありました。最初の出会いは大学の学部3年次の有機化学の学生実験のときです。ジアゾニウム塩を経由して、*p*-ヒドロキシアゾベンゼンを合成し、サンプル管に保存していたところ、次の日に（次週だったかもしれない）サンプル管の中にきれいなオレンジ色の大きな結晶が析出していました。周りの友人のものは多結晶になっていましたが、筆者のものはきれいな単結晶が偶然できたようでした。他のことは忘れましたが、この結晶のことだけは今でもよく覚えています。その当時にはアゾベンゼンがフォトクロミック化合物であるなど全く知らず、のちにフォトクロミズムの研究をするようになってから、当時のできごとを思い浮かべることになりました。学部4年次に高分子化学の研究室に配属となり、結晶とは無縁のように思われましたが、モノマー合成などにおいて、再結晶はかなり得意な方でした。と言っても、所詮は精製の手段であったので本当の有機結晶の研究に携わるのはもっと先のことでした。博士取得後、1年9ヵ月間のアメリカでのポストドクを経験し、九州大学の入江正浩先生の下でポストドクを始めることになりました。今から25年前のことです。ここで、フォトクロミック化合物のジアリールエテンを扱うことになりました。入江先生から、結晶材料の研究かアモルファス材料の研究か、どちらの研究テーマが良いかという話になりました。高分子化学の専門知識があったので、アモルファス材料の方が研究を進めやすいと思いましたが、なぜか結晶の方を選ぶことになりました。何か結晶への魅力があったのかもしれません。ここから、有機結晶にどっぷりつかることになりました。この後の結晶フォトクロミズムの研究についてはまたどこかで紹介できればと思います。きっかけは大したことではないかもしれませんが、何かに一生懸命打ち込むことが非常に重要であると考えています。

今年度から日本化学会春季年会を対面で実施することができ、徐々に元の状態に回復しつつあります。研究発表は、有機結晶・超分子化学というくくりで有機結晶と超分子化学の境界が薄れ、新しい広がりを感じています。今後も有機結晶部会の活動がますます活発になり発展していくことを祈念いたします。今後とも部会員の皆様方のご協力をよろしくお願い申し上げます。